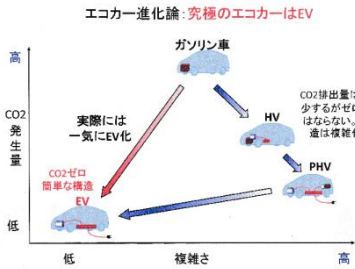


エコたま グリーンNEWS



多摩市民環境会議機関紙 第 134 号(通巻第 194 号) 2014 年 9 月 25 日発行 発行人: 清水武志朗
 編集人: 井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山複合施設 301(事務局員は常駐しております) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
 URL http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

電気自動車(EV)の役割と太陽光発電とのコラボ



究極のエコカーは走行時に二酸化炭素(CO₂)を発生しない電気自動車(EV)だと考える。現在のガソリンエンジン車はまだCO₂の排出量が減らない。ハイブリッド(HV)やプラグインハイブリッド(PHV)車になるとCO₂の排出量は減るが、ゼロになるわけではないし、構造も複雑化する。それがEVは構造が簡単で排出ゼロなのだ。

ところが、実際には日本のEVの販売は伸び悩んでいる。最初のころは急速充電器が普及していなかった理由もあるが、充電ステーションに関しては関係する自動車メーカーの4社連合が4000台の普及を目指して取り組んでいる。充電の方法も急速充電器ばかりでなく、米メ

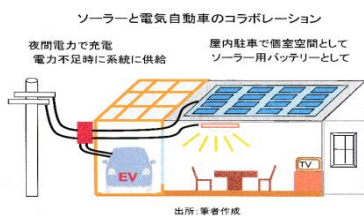


最近では既存モデルのエンジン取りはらって、モーターに換装する作業が容易に行われている。新聞販売店では配達用のバイクを音の静かな電動式に替えたりしている。また、人力と電気のハイブリッドの例では、ヤマト運輸の宅急便の配達に電動アシスト自転車とリヤカー(スリーター)が使われたり、ペロタクシーも電動アシスト三輪自転車が登場するなど、「電動」がいろいろな分野に浸透しつつある。

EVと太陽光発電のコラボレーションは、これからのスマート(賢い)エネルギー社会の担い手となる。

太陽光発電の弱点は、晴れた日中にしか発電できないなど、発電量が天候に左右され、大きく変動することだ。

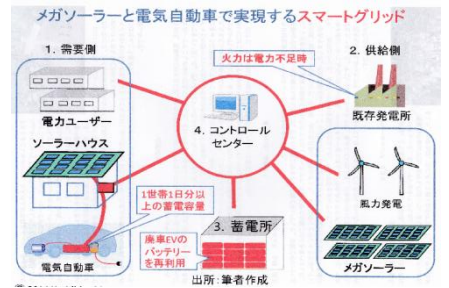
EVの電池から家庭に電気を送電 ですから、蓄電池(バッテリー)



やプラグインハイブリッド(PHV)車になるとCO₂の排出量は減るが、ゼロになるわけではないし、構造も複雑化する。それがEVは構造が簡単で排出ゼロなのだ。ところが、実際には日本のEVの販売は伸び悩んでいる。最初のころは急速充電器が普及していなかった理由もあるが、充電ステーションに関しては関係する自動車メーカーの4社連合が4000台の普及を目指して取り組んでいる。充電の方法も急速充電器ばかりでなく、米メーカー、テスラのように短時間でバッテリーそのものを交換してしまったり、道路に電線を埋め込んで走行中に非接触給電する方法などもある。

最近では既存モデルのエンジン取りはらって、モーターに換装する作業が容易に行われている。新聞販売店では配達用のバイクを音の静かな電動式に替えたりしている。また、人力と電気のハイブリッドの例では、ヤマト運輸の宅急便の配達に電動アシスト自転車とリヤカー(スリーター)が使われたり、ペロタクシーも電動アシスト三輪自転車が登場するなど、「電動」がいろいろな分野に浸透しつつある。EVと太陽光発電のコラボレーションは、これからのスマート(賢い)エネルギー社会の担い手となる。太陽光発電の弱点は、晴れた日中にしか発電できないなど、発電量が天候に左右され、大きく変動することだ。EVの電池から家庭に電気を送電 ですから、蓄電池(バッテリー)で出力を平準化する必要がある。余剰のときはバッテリーに蓄え、不足のときにバッテリーから取り出して使うというように。

EVから家庭に電気を送ることもできる。ここでもソーラーを活用すればよりスマート化が深まる。EV搭載の電池は電力不足時に家庭に電力を供給するとともに、



将来のスマートエネルギー社会はこうなる太陽光発電の蓄電池としても活用できる。

将来はメガソーラーとEVでスマートグリッド(賢い送電網)が実現する。メガソーラーや風力発電などで発電した電力は、地域のコントロールセンターを経由して需要側(電力ユーザー)やスマートハウスに送られる。だから、既存のおもに火力発電所は電力の不足時だけ稼働すればよいことになり、CO₂の発生も大幅に削減することにつながるだろう。(図や写真類は○Murawasa Yoshihisa)(立命館大学大学院客員教授・村沢義久さんの講演から)

深化するクッキープロジェクト

多摩第一小学校のヤギ、クッキーの親子の住環境を整備する「クッキープロジェクト」はますます深化している。すでに小屋はでき上がっているのだが、小屋の周辺の景観を高めるために9月13日午前、小屋の南側スペースに植栽が行われた。



生徒たちのアイドルになっている

植えられた木はコナラが2本、クヌギが1本の計3本。大きく掘った穴に、学校で長期間つくってきた腐葉土まじりの土をたっぷり入れ、樹木を仮配置したあとはトラックで運んできた黒土を十分にかけるなど、万全の方法で植栽。



このプロジェクトを提唱した腐葉土の入った土を掘り出す棚橋校長先生以下、教師や当会議のスタッフを中心とするボランティアらが、腐葉土の掘り返しや運搬、投入などの作業に取り組んだ。このあいだも、第一小の生徒たちがやってきて、クッキー親子に好物のレタスをあげるなど、ヤギ・アイドルの人気ぶりがうかがえた。



今後は生徒らが小屋に絵を描いたりして完成させ、10月末の平日に学校で「完成式典」を開く予定。

最後に黒土をたっぷりかぶせる

さえずりの森でひさしぶりに10人集まる

さえずりの森では9月15日の祝日に155回目の保全作業が行われたが、この日の都合がよかったのか、久しぶりに10人ものボランティアが集まり作業を行



一境界線の杭打ち



前列左から2人目が渡辺さん

った。以前は10人以上もめずらしくなかったが、ここ数年は6~8人程度が多かった。

作業は、補助金からみで必要な緑地の境界線の部分に21本の黄色い樹脂キャップのついた杭を打つ。これは清水さんと西さんの二人で行った。あとはJTB側の斜面の草刈り、水平道やバス通り側の斜面の整備、ごみ拾いなど。特筆すべきは、9月から始まった今年度の環境学習セミナーの受講者で、当会議の全体会議にも出席してくれた渡辺智征さん(諏訪2丁目住宅在住)にこの日の作業情報を伝えると、さっそく顔を出し一緒に汗をかいてくれたことだ。この積極的な姿勢は大歓迎。今後もレギュラーメンバーになってくれることだろう。

多摩川源流キャンプの報告会



9家族約30人が出席してくれた

今年8月1日から3日まで山梨県小菅村を中心に行われた「多摩川源流体験サマーキャンプ」の保護者への報告会が、9月21日午後、市立グリーンライブセンターで開かれた。キャンプへの参加者は19人だったが(兄弟姉妹が2組)、9家族の約30人が出席してくれた。

主催者の多摩市水辺の楽校運営協議会が、この日までにキャンプの報告書と3日間の行動の写真がたくさんおさめられたCDを作成して保護者に配付。

キャンプ参加者は小学校3年生から6年生までだったが、なかでも4年生が9人と一番多かった。最も年少の3年生は4人だったが、源流域の溪流のぼりや笠取山への登山などよく耐えたと感心するほどで、保護者からも「ひとまわりしっかりした子になって帰ってきた」といった感想が聞かれた。

登山の最中ののぼりとくだりの2回、野生のシカが近づいてきて、まるでペットのように隊列のあとについてきたなど、ふだんは思いもよらないような自然との遭遇もあり、みな改めて現地を思い出しているよう。

やはり4人参加した6年生は、感想文に「たぶん今回が最後になるだろう」などと書いていたが、これに対して協議会の西会長は「中学生から小学3年生までという参加条件なのだから、来年以降も参加してもいいんだよ」と次年度以降の参加を誘いかけていた。

なお、来年の日程は7月31日から8月2日までと、次の日程も発表された。

永山フェスに「まち美化協議会」が出展

第17回目となる「永山フェスティバル」が9月20~21日に開かれ、多摩市まち美化推進協議会が2度目の出展をした。これは平成24年10月1日に施行され

た「多摩市まちの環境美化条例」の市民への啓発のための出展だ。

会場は、前回の初出展のときはグリナード永山の入り口を入ったエスカレーターの手前という絶好の場所だったが、今回はグリナード永山のオープン40周年記念ということで、その場所がグリナードそのものの展示場となってしまった。このためエスカレーター先の「つばさ広場」の奥側となる。

場所的には人通りの少ないところになったが、協議会のメンバーはいすに座って市民を待つだけでなく、自分から出て行って通行人にキャンペーンのためのポケットティッシュや市内4駅の喫煙禁止場所などが書かれたパンフレットを配るなどし、啓発活動につとめていた。啓発のために呼びかけた人は、カウンターによる記録で20日が大人215名、子ども28名、21日が大人366名、子ども84名。約740用意したポケットティッシュはすべて配付されて底をついた!



展示物をのぞくサッカー少年たち

神田川、日本橋川、隅田川へふたたび

昨年秋に乗船した浅草橋から神田川、日本橋川、隅田川、東京スカイツリーサイドへの船旅に、今年も乗る機会に恵まれた。

水道橋やお茶の水の中央線の北側を流れる神田川、日本橋の高速道はいつ姿を消すのか川を、下流から上流へと向かい、飯田橋の先(三崎町)から左折して日本橋川に入り、首都高速5号線の橋脚のあいだを名橋・日本橋へ。そして今回は直接、日本橋川から隅田川に出たものだが、今回は茅場橋から右の亀島川に入り隅田川に出ると、船(粋人丸)は右折し佃大橋のほうまで客を運んでくれた。



リバーシティ21の数棟の高層マンションが立ち並び、川の旅人たちを圧倒する。さらに先に勝鬃橋が見えるが、そこまでは行かず、隅田川の左岸にある佃島の説明が入った。いわゆる「佃煮」はその昔、塩を使ってつくられていたが、千葉県野田から安い醤油が手に入るようになり、醤油で煮あげられるようになったのだという。

「東京スカイツリーのネックレス」とも呼ばれる清洲橋(国の重要文化財)は、ドイツのケルンにあったつり橋をモデルに設計されたという優美な橋だ。

下町のミニ・パナマ運河とも称される小名木川開門にも再度向かった。ここはやはり千葉の行徳方面から江戸に塩を運ぶルートとしてつくられた運河。だが近年、東側の工業地帯で地下水の汲み上げが過剰に行われ、地盤沈下を起し、そちらの水位が低くなったためにパナマ運河方式の通行をせざるを得なくなったのだ。東京都の管理。

船から見たリバーシティ21

